

東西文明とゾロアスター教

大多和 明彦

(平成11年9月30日受理)

The Relation between Zoroastrianism and the Culture of West and East

Akihiko OTAWA

(Received on September 30, 1999)

序

あちこちで宗教紛争が絶えない。カトリックとプロテスタント、イスラムとユダヤ、イスラムとヒンドゥー。どうして寛容になれないのだろうか。どうして同じ頂上を目指す同行人と考えられないのだろうか。「ただ我一人のみ尊し」とする根深い我執から逃れることができないからである。ここから狭窄のお調子者が暴発する。

そこで「だから宗教は怖い」という考えが、強まってくる。ことに、無宗教と称する人が圧倒的に多いこの日本で、今やここ日本では、圧倒的多数が半信半疑ながらも信奉しているのは、神でも仏でもなく、科学技術である。日本人の多くは科学技術教の信徒であると言ってもよいほどだ。

科学の根底には、論理学と数学を柱とし、検証可能性を壁とする合理的知的精神がある。この「知的精神」の働きが、人間のすべての心的作用のなかで最も優れていると、考えられているようだ。そしてこの「知的精神」に基づいた技術こそが、人間に富を与えてくれる。富があれば不安もなくなる。現に世界で豊かで安心できる国はすべて、技術の先進国ではないか。なるほど科学技術の弊害は、近年目立つようになってはきたが、これもそのうち「知的精神」によってなんとか克服されるだろう。こんなふうには私たちは一抹の不安を感じながらも漠然と考えている。

宗教が怖いのは、これに「はまる」人々が「知的精神」に未だ至らず、あるいはそこから逸脱して、「霊」とか「魂」といったいわば未開の心的作用領域にとどまるか

らだ。こうして独りよがりの「狂信」が始まる。困ったものだ、科学技術教の信徒たちは思う。そうしながら実は私たちは、知らず知らずに、「我一人尊し」としていていることに気付かないでいる。もちろんこの場合の「我」は、「知的精神」である。

憎悪に駆られて宗教紛争を引き起こしている人々も、それを冷ややかに蔑んでみている私たちも「唯我独尊」の罫にはまりこんでいるのだ。

しかしそもそも釈迦が「唯我独尊」といったとき、その「我」は決して憎悪や侮蔑を含むものではなかった。「独り尊い我」とは、民族の独断的な集合意識を指すのでもなく、もちろん個人的主観などでもなく、慈悲溢れる宇宙そのものを意味していた。これを「法身」という。存在するすべてのものを一切平等と見る「平等智」の当体である。平等智こそが釈迦の悟った「独り尊い我」なのであった。

憎悪と侮蔑が残る限り、私たちの心から不安が払拭されることはない。不安は闘争を生む。ゆえに平和を築く努力とは、憎悪と侮蔑を私たちの心から取り除こうと努めることである。平等智を我がものとせんとすることである。

平等智の立場にもしも立つことができれば、それぞれが皆平等、皆同行となる。富士山の頂を目指すのに、ある一つの登山口から登らなければならぬということはない。どのスタイルでなければならぬということもない。自分にあったところを、自分で自由に決めればよいのだ。イスラムのスタイルもよい。ヒンドゥーのそれもよい。要するになんでもよい。そして道々出会ったら、お互いの道を行きましようと思まし合うことができるはずだ。

本論は、遠くすべての宗教の平等性を視野に置きながら、ひとまずは、東西の文明に対しゾロアスター教がいかなる位置にあるかを論じようとするものである。

1 ゾロアスター教と西洋文明

ゾロアスターという語は、謎に包まれた、なにかおどろおどろしい秘儀的な響きを持っている。いわく占星術師、夢占い師、魔術師、あげくのはては詐欺師、山師。

このような印象を作りあげるのに大きな役割を果たしたのは、まずは『マタイ伝』だろう。そこには、ベツレヘムでのイエス誕生に際して「東方の三博士」が、「星」に導かれて来訪したと、述べられている。当時としてはこのように言さえすれば、「東方」がペルシャ（イラン）を指し、「博士」が占星術にたけたゾロアスター教徒であることは、暗黙の内に了解されたのではあるまいか。彼らは「黄金」(富)、「乳香」(祭祀)、「没薬」(血止め)を捧げてイエスを礼拝した。つまりこの三人はそれぞれ、経済と祭祀、医術の専門家でもあったのである。そして彼らは夢を見、それを、帰路ヘロデ王のところへ立ち寄るなどという意味だと解いて、そのまま東方へ帰ってしまった。彼らは「夢占い師」でもあったのだ。

『マタイ伝』はこのようにして、キリスト教が東方のゾロアスター教と深く結びついていることを示しながらも、ゾロアスター教が占星術、夢占いを専らとするいわば眉唾物であるという印象を作り上げた。以来西洋文明は、自らの独自性を協調するために徹底してこの印象を強化し、東方からの影響をできるかぎり覆い隠そうとしてきたのだった。

西洋文明への東方からの影響は、しかし、イエス誕生にさかのぼるはるか以前にすでに明らかだった。それを最もよく示しているのが、西洋科学の礎となった大数学者ピタゴラスにまつわる数々の伝説である。

ヒッポリュトスは、「ピタゴラスはカルダイアのザラタス(ゾロアスタ)のところへ行ったという。」と語り、西洋の学問が東方からの影響のもとに成立したことをはっきりと認めている。(内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第1分冊 岩波 209頁) さらにエレア学派の始祖クセノファネス(前6前半～5前半)は、そのピタゴラスが「生物類縁」という考えを持っていたと、次のように証言している。

「ある時彼(ピタゴラス)は子犬が打たれているところを通りかかり、これをあわれんで次のように言ったとい

う。『よせ、ぶつな。たしかにこれは私の友人の魂だ。声を聞いて、私はそれとわかったのだ。』(同上書 271頁)

新プラトン主義の始祖プロチノスの弟子であったボルピュリオス(後233～304)の語るところは、上記のクセノファネスの証言を補強する。

「次のようなことはピタゴラスが言ったこととして一般によく知られていた。すなわち、第一に魂は不死であること。第二に魂は他の種類の動物に生まれ変わること。さらに第三に、生成したものはある周期にしたがってふたたび生まれてきて、絶対的な意味で新しいものは何もないということ。そして、魂をもって生まれてきたものはすべて同族的なものであると考えなければならないということ。以上のような教説を最初にギリシャにもたらしたのはピタゴラスであったように思われる。」(同上書 206頁)

さらに続けてボルピュリオスは、「ピタゴラスは、神々への祭儀やその他の生活にまつわるいとなみについては、マゴス僧(前述の『マタイ伝』が語る「博士」のこと)たちに師事し、これらを修得したと言われている。」と語っている。そして「ピタゴラスは殺生や、殺生する人を避けたので、生き物を食うことを慎むだけでなく、屠殺人にも獵師にも近づかなかった。」(同上書 207頁)

ここで述べられているピタゴラスの思想、つまり魂の不死性、輪廻転生、生きとし生けるすべてのものの平等性、不殺生といった思想は、実は、すべてゾロアスター教理論の内にすでに含まれているものである。これらの証言からすれば、ピタゴラスがイランから最初に、これらのゾロアスターの教説をもたらしたということになる。

ところで時代は下るが、1511年にラファエルロが描いた有名な『アテナイの学堂』にも、ゾロアスターは登場している。天を指し示すプラトンと地を指しているアリストテレスが中央に大きく描かれた画面の右下に、左手に地球儀を持つプトレマイオス、そして地面にコンパスを回しているユークリッドと並んで、ゾロアスターは右手に天球儀をもって描かれている。ここでもゾロアスターは「占星術士」として、西洋文明の殿堂に忍び入っているのである。

ラファエルロがゾロアスターを西洋科学の殿堂の中に忍び込ませたのは、それにさきだってプラトン主義者だったプレトン(1355～1450)が、フィレンツェの知識人に多大の影響を与えていたからである。彼は本名をゲオルギウスと言い、コンスタンティノポリスの生まれで、25

歳の時トルコでイスラム神学、ユダヤ神学、カバラ（ユダヤの秘密の教え）を学び、さらにゾロアスターとプラトンを学んだ。コシモ・デ・メディチの保護を受けてフィレンツェにプラトン研究の拠点を作ったプレトン^{プレトン}は、そこで「ゾロアスターこそ、ピタゴラスとプラトンの学派の始祖であった。」と、知識人達に喧伝したのである。

プラトンの「イデア」という考えがピタゴラスの数学の影響を受けていることは誰もが指摘している。そしてそれ以上の言及をするものはほとんどいない。しかしピタゴラスがゾロアスターの教説を初めてギリシャにもたらしたのだとすれば、プラトンの始祖もゾロアスターだと、プレトンが言うのは当然である。

ところでプラトンは「善^{アガト}は魂にとって認識の原因となるのみならず、認識の対象であるすべての存在者に存在を与える力をもっている」と述べている。（『国家』第6巻）つまり「善^{アガト}」が初めて、存在者が存在することを可能とし、すなわち存在者を創造し、さらにそれが認識されることを可能にするのだと、プラトンは考えている。そして「太陽は、事物が光の内に見られる原因であるのみならず、万物が成長する原因でもある。」と語って、認識と存在の原因とされる「善^{アガト}」を太陽に喩えた。（同上）

このようにプラトンが「善^{アガト}」をその理論の最高位に置くのは、師ソクラテスがいつも「善^{アガト}」とは何かと若者達に問いかけていたことの影響だと考えられる。しかしソクラテスより以前に、現実世界での善^{εὖ}と悪^{κακόν}の対立を越えたいわば「善悪の彼岸」に、超越的な最高善としての絶対的の一者＝アフラ・マズダを置いていたのは、ほかならぬゾロアスターだった。ソクラテスはゾロアスター理論を知っており、それによって若者達に「善^{アガト}」とは何かと問いかけたのだと言える。しかもゾロアスターの教説では、この最高善としてのアフラ・マズダは、「光」もしくは「火」に象徴される。「拜火教」といわれる所以である。プラトンはピタゴラスやソクラテスを通じてゾロアスターを学び、これによって「善^{アガト}」を光り輝く「太陽」に喩えたのだ。私にはそう思われる。このように考えれば、プラトンが魂の輪廻説を語っているのも、彼がゾロアスターを受け入れていた証左だと言うことができる。

ラファエルロの「アテナイの学堂」に登場する西洋科学の巨匠達を支えているのは、画面右下に小さく描かれたゾロアスターだったのだ。このはかな記憶を無視で

きなかった西洋人は、しかし、彼を小さくしか描かなかった。それでも西洋文明にはっきりとインプリントされたゾロアスターは、いくたびも姿を変えて立ち現れてこざるをえなかった。

例えばプロチノスの『一者』として、あるいはモーツァルトの『魔笛』に乗って、ないしはニーチェの『ツァラトゥストラかく語りき』の声となって、またヒットラーの天翔る狂気の「双頭の鷲」として、ハイデガーの『存在と時間』として、

2 ゾロアスターの生年について

ゾロアスターの生没年代に関しては諸説紛々としている。リュディアのクサントス（前6世紀末の人）は、これを、アケメネス朝ペルシャのダリウス大王（在位：前522～486）の子クセルクセスがギリシャに侵攻した前480年の第三回ペルシャ戦争に遡ること6000年前とした。エウドクソス（前5世紀末から前4世紀中）は、ゾロアスターはプラトンの死（前347年）よりも6000年前の人だと語ったと伝えられている。（プリニウス『博物誌』30.2.1）彼らの説では、ゾロアスターはおおよそ前6500年頃の人ということになる。両者ともに6000という数字をあげているが、これはゾロアスター教の説く「創造と混合と分離」という三つの千年紀からなる3000年という世界単位年の倍数であろう。

ところでゾロアスター教の聖典は『アヴェスター』と呼ばれ、①神事の書「ヤスナ」（最古層の17章の古歌・「ガーサー」を含む）、②讃歌の書「ヤシュト」、③魔除けの書「ウイーデーウダート」から成り立っている。この中の神事の書「ヤスナ」は、アフラ・マズダから天啓を受けたゾロアスターが、砂漠を彷徨いながら苦難の伝道の旅を続けた様子を描き、「ああ私はいずれの地にとどまり、いずれの地に行くべきか。」（ヤスナ46章）と、ゾロアスターの嘆きの声を記している。そして讃歌の書「ヤシュト」には、苦難の末ついに彼は、ウイシュタースパ王を改宗させることに成功したと、次のように伝えられている。「ウイシュタースパ王は不義^{ドゥルジ}を追い払い、神聖なる宗教のために広き間を作れり。」時にゾロアスター、42歳であったと言われる。さらに、ゾロアスター教の百科辞書ともいべき中世ペルシャ語文献『デーンカルド』や『ザートスプラムの選集』にもまた、「ウイシュタースパ」と呼ばれる王が、ゾロアスターによって改宗させられたことが述べられている。

そこで、ここに述べられる「ウイシュタースパ」王が、ゾロアスター教を国教としたアケメネス朝ペルシャのダリウス大王の父だとしたうえで、ゾロアスターの生年を前630年とする説が有力になっている。なるほどこの王朝の首都ペルセポリスの大遺跡を見れば、この王朝がアフラ・マズダを祭っていることは疑いようもない。しかしダリウスの父の名は「ヒスタスベス」ということになっており、これを『アヴェスター』が語る「ウイシュタースパ」と同定することは、少し困難があるようだ。

ところで、今年(1999年)の夏、私はペルセポリスの大遺跡を堪能した後、シーラズからイスファハンに飛んだ。そこで60円のバスチケットを手に入れるため大いに苦労したあげく、砂漠のただ中を300キロ、冷房のないバスに揺られて約4時間、ようやくヤズドの町に入ったのだ。どうしても「沈黙の塔」と呼ばれる鳥葬台に立ってみたかったのだ。夕暮れ迫るなか英語の分かるドライバーを捜し当て、彼が紹介してくれたリーズナブルなホテルで休んだ翌朝、私は同じ運転手に電話した。午前中ヤズドの町の北北西約50キロにあるゾロアスター教の洞窟神殿「チャクチャク」を訪ね、午後には水パイプを愉しんで、涼くなってから「沈黙の塔」へ行きたいと言うと、アルデシールと名乗る善良そうなドライバーの顔が輝いたように見えた。車中すっかり打ち解け、こちらの素性がわかってから明かしてくれたことには、53歳になる彼は、なんと、ゾロアスター教徒だったのだ。アルデシール氏は、閉門中だった「チャクチャク」神殿の鍵を持ってきて開けてくれ、炎の燃え立つ中で儀式のやり方を教えてくれた。そして若い僧侶をつれてきて、お茶をごちそうしてくれたのだった。そのうえ私はその晩、彼の大きな家のゾロアスターを祭る神棚の前で、盛大な晩餐までいただくことになった。「写真を撮っていいか。」と尋ねると、彼はゾロアスター教の根本理論を説いて、こう言うのだった。「ゾロアスター教は何も禁じない。すべては君の自由意志の問題だ。君は善を為すことも、悪を為すことも、君の自由意志で選ぶことができる。いつも君自身が決めるのだ。All is up to you.」一族郎等が集まって来、歌や踊りまで飛び出す。請われるまま私が炭坑節を歌い踊ると、おばあちゃんから子供まで私についていっしょに踊った。それは夢かと思えるひとときだった。

そのアルデシール氏は、翌日いっしょに訪ねた町中のゾロアスター寺院「火の家」で、「ミスター大多和、こ

の火は4000年間燃え続けているのだ。」と言った。「一般に前7世紀にゾロアスターが生まれたと言われていることは、君も知っているだろう。しかし我々はそう思っていない。これは学問上立証することはできないが、信仰上の真理だ。」アルデシール氏の言う信仰上の真理によれば、ゾロアスターは前2000年頃生まれたということになる。

しかし、氏が「^{アヴェスター}火の家」で買うように薦めてくれた『THE RELIGION OF ZARATHUSHTARA』(I.J.S. TARAPOREWALA. a publication of SAZMAN-E-DARAVAHAR TEHRAN, 1980)には、ゾロアスターの生年は前1000年頃が妥当だと、次のように書かれている。

「As His date is even now not quite satisfactorily settled, we may here provisionally accept a date perhaps three or four centuries earlier than what used to be ascribed to Him. So we may agree Prof. A.V.W. Jackson in putting Him as having lived about the beginning of the first millenium B.C.」(同上書 11頁)

これに続けてさらにこの書は、おおよそ次のように言っている。「しかし秘教的伝承の言うところでは、ゾロアスターは『先史時代』ともいふべき遠い時代に生きていた。そしてまた他の伝承によれば、ゾロアスターというのはたった一人いたわけではなく、同じ名前の幾人もの師が現れたのであって、近來の学者達が語っているゾロアスターとは、その最後の者にすぎない。」(同上箇所)

さて、ゾロアスターはクサントスやエウドクソスの言うように前6500年頃の人であったのか、あるいはダリウス大王の父を改宗させたとして前7世紀の人とすべきか、もしくはアルデシール氏の信仰上の真理を受け入れて、前2000年とすべきか、それとも前述の書が言うように、前1000年頃とすべきか、はたまた、先史時代まで遡らせるか。

「前6500年頃」というのは、ゾロアスター理論からの数字あわせにすぎないだろうが、前述の「秘教的伝承」が語る「先史時代」とは合致する。しかしこう言ってしまえば、結局、ゾロアスターの生年はわからないと言うことと同じである。

アルデシール氏が言う「前2000年頃」というのは、「アーリア人」がカスピ海の北方からイランに南下し始めた時期と、ほぼ合致する。ゾロアスター教がアーリア

人の考え方から生じていたものだということはできよう。しかしこの時代に、「アフラ・マズダ」とか「ゾロアスター」といった名前を見いだすことはできないのだから、ゾロアスターの生年をこままでと遠く設定することは困難である。とすれば、ともかくアフラ・マズダの名前がペルセポリスに見いだされる前6世紀に近い年代を考えることが妥当だろう。私はひとまず、前記の書が言うように前6世紀から前10世紀くらいに考えておくのが妥当ではないかと思う。

いずれを取るにしても動かすことのできないのは、①ゾロアスター、②仏陀、③イエス、④マホメットという順序である。つまりゾロアスターは、これまでの歴史的資料に現れる限りにおいて、人類最初の覚醒者であると言うことである。ゾロアスター教が史上初の啓示宗教といわれる所以である。

3 東西の中点

アーリア人がカスピ海の北方からイランに南下し始めたのは前述のように前2000年頃のこととされている。「イラン」という名称自体が、「高貴」を意味する「アーリア」の転化である。

それより以前、前2500年頃ころにはインダス川周辺にインダス文明が栄えていた。1922年に考古学者パナージによって発見されたモヘンジョダロには、東西に走る大通りがあり、穀物倉庫や共同の大浴場、そして完全な排水設備が備えられていた。

自らを「アーリア」(高貴)と称してカスピ海からイランに南下した一団は、東へとさらに転じて五河地方^{パンジュブ}に侵入し、おおよそ前2000年頃、このインダス文明を滅ぼしたのである。これがインドアーリア人となる。先住の「ドラヴィダ人」たちは、黒色低鼻の「ダユス」と呼ばれ、邪鬼と同視されて、後に明確な形を取ってくるカースト制度の内で最下層のシュードラ(奴隷)に置かれることになる。

また前2000年頃移動し始めたアーリア人たちのある者は、カフカス山脈を越えて小アジアへ到り、またある者はボルガ川やドナウ川を越えてギリシャへ到った。つまりギリシャ人、トルコ人、イラン人そしてインド人は、こうして共通の祖先から派生したのである。

この共通性が見いだされたのは、イギリスがエリザベス1世のもとでインドの植民地化に乗り出したことがきっかけであった。インドに到ったイギリス人達は、ヒンド

ウー教の聖典『ヴェーダ』を記すサンスクリット語が、ヨーロッパ諸言語と同様の文法体系を持つことを発見した。そしてこれらの言語は同一の祖語が自然に変形したものと考えられ、この共通祖語が印欧語 *indo-european language* と名付けられた。

シュライヒャーによると、人間の言語は①孤立言語、②膠着言語、③屈折言語という三段階を経て変化してきたと考えられる。孤立言語とは語幹と文法要素との区別のない言語、すなわち語を単なる語幹に還元する言語である。そして膠着語とは語幹と文法標識を並置する言語。また屈折言語とは、語の内的組織が厳密な規則(形態法)によって規定されている言語である。シュライヒャーは、この最後の屈折言語においてこそ、精神の真実の表象が可能になると考え、その最も典型的なものを *indo-european language* としたのである。

イラン、インド、ギリシャの共通性は、言語体系の内に見いだされるばかりではない。周知のように、『アヴェスター』と『ヴェーダ』と『ギリシャ神話』の間には、非常に強い類似性が認められる。

『アヴェスター』では最高神アフラマズダは、「光」もしくは「火」によって象徴されることは、プラトンに関連してすでに述べた。そして『ヴェーダ』では「火神・アグニ」がしばしば勧請される。ちなみにこの「アグニ」という語から、現在の英語 *ignition* (発火) が来ている。火は供物を焼いて、それを神々へと届けるものと考えられたのである。また『ギリシャ神話』の最高神「ゼウス」は、言うまでもなく「光」としての「雷神」である。「雷」はすべての生命の源となる雨を降らせ、したがって万物の創造の源となると同時に、時にはすべてのものを破壊しつくす。「アフラ・マズダ」の「火」の象徴面が「アグニ」となり、「光」の象徴面が「ゼウス」となったということができよう。

さらにゾロアスター教では祭儀に際して「ハオマ」と呼ばれる一種の酒を用いるが、これはヒンドウ教の祭儀で用いる「ソーマ酒」に対応する。そしてギリシャ神話の世界では酒は「バックス」として祭られていた。イランの「ハオマ」、インドの「ソーマ」そしてギリシャの「バックス」、これらの内には歴然とした類似性を認めざるを得ない。

ゾロアスターの生年を前2000年頃とするアルデシール氏は、これらのイランとインドとギリシャとの類似性から、ゾロアスター教こそがヒンドウ教やギリシャ神

話の源となったのだと、考えているようだ。しかしゾロアスターという固有名詞を持った体系的な宗教思想がすでに前2000年頃に成立していたと考えるのは、もちろん、あまりにも無理がある。何よりもこの時代にはまだ、ゾロアスターという名前は登場していないからだ。しかし後にゾロアスターという一人の人物の内に結晶してくる考え方が、アーリア人の移動にともなってまずはイランにおいて生じ、このイランから東のインドと西のギリシャに広まっていったと考えることは可能だろう。

私は以前ふと、仏陀が6年間の苦行の後、悟りを開いた地「ブツガヤー」と、ソクラテスが若者達に善とは何かと問いかけていた「アテナイ」の地を、世界地図の上で結んでみたことがある。そしてその中点を取ってみた。沈黙の塔(鳥葬台)の地ヤズドが、そこにあった。私はそのとき、東西文化の中点はヤズドだと思ったのである。アルデシール氏の信じるところをそのまま受け入れるわけにはいかないが、ゾロアスター教として後に結実してくることになる原宗教思想ともいうべきものが、まずはこのヤズドの付近で熟成されていたのではあるまいか。そして、それがはるか東に伝搬されてパラモン教からヒンドウ教そして仏教として結実し、また西に伝えられてギリシャ神話として結実したのではあるまいか。

ところで、イランの文化がここ日本にまで伝えられてきていることが近來徐々に明らかにされてきているが、これはイランがはるかな東方とつながっていることの一つの証拠である..

イラン学の専門家・井本英一氏は、昭和54年3月19日の毎日新聞紙上に「江南地方に移り住んでいたイラン系西域人(の子孫)が、百済を経て日本に渡り、飛鳥寺の造営に当たった。」という説を発表した。日本書紀に記されている瓦博士や寺工、画工などの奇妙な名前が、6世紀頃のペルシャ語できれいに解けたのである。蘇我馬子が飛鳥寺を完成させたのは、596年。そのころイランは、アケメネス朝と同様ゾロアスター教を国教としたササン朝ペルシャ(226～651)の絶頂期だった。ゾロアスター教が何らかの形でこの日本にまで入ってきていたことは、確かである。

さらに松本清張氏は、奈良の明日香村の小山に、今も野ざらしになっている通称「酒舟石」と呼ばれる石造遺跡に注目した。氏はこれを、来日していたイラン人達がハオマ酒を作るときに使ったのだらうと推理したのである。そしてさらに氏は、同じ明日香村に放置されている

通称「猿石」や「亀石」が、ペルセポリスにある「双頭の鷲」を刻もうとしたものだ、と言っている。私も実際に確かめたのだが、「双頭の鷲」の特に嘴の印象は、確かに「猿石」や「亀石」にうかがうことができる。そしてまた法隆寺金堂釈迦三尊像の天盖にある「鳳凰」の嘴の形に着目したのも、松本清張氏だった。それは「双頭の鷲」の嘴の形と全く同じなのである。(松本清張『ペルセポリスから飛鳥へ』NHK出版 昭和54年)

私はこの夏イランから帰国後まもなく韓国に飛び、公州博物館で百済王妃の「頭枕」を見た。この6世紀初頭に作られた枕の両端には鳥が乗っており、その嘴の形は前6世紀頃にペルセポリスで作られた「双頭の鷲」の嘴とそっくりだった。(『KONGJU NATIONAL MUSEUM』38頁)

さらに百済の武寧王の陵墓から出土し公州博物館に陳列されている「金製冠飾」は、燃えさかる火炎のデザインであり、その火炎の中にロータスの花弁と蕾がリアルに表現されているではないか。(同上書 20頁)この6世紀初頭に作られた「金製冠飾」について、韓国中央博物館編集の『名品図鑑』は、「仏教の光背のような形をとって、仏教的な要素を加味した、まことに華やかな冠飾」だと、解説している(274頁)。

なるほどこの冠飾のデザインは「光背のような形」だともいえるが、そもそも「光背」自体が、アフラ・マズダを象徴する「火」からきているのだ。しかもこの「冠飾」は「光背」というよりもまさに「炎」そのものだと言ったほうがよい。そして火炎の中のロータスのデザインは、実はすでに前6世紀のペルセポリスの遺跡に、それを埋め尽くすと言っていいほどたくさん描かれているのである。特にダリウス大王の命によって建てられた「謁見の間」の階段レリーフには、ロータスが無數と言^{フバダニ}っていいほど刻まれている。ダリウスの子・クセルクセス1世が立てた「万国の門」も同様である。鷲の翼に乗るアフラ・マズダの有翼円盤の下にも、ぎっしりとロータスが描かれている。これほどにたくさん描かれたロータスは、アフラ・マズダーを祭るペルセポリスにあっては、もちろん、「太陽」を象徴したのだ。つまり「光」を示すのである。6世紀に百済の地で作られた「金製冠飾」は、「ゾロアスター教的要素」としての「炎」と「光」を表していたのである。

こうしてペルセポリスのデザインがはるか東方の日本にまで伝わってきたのは、韓国を経由してのことだとい

うことは、明らかである。

以上本論では、ゾロアスター教をめぐる歴史的な考察を行ってきた。イランに生じたこの宗教思想は、アーリア人の移動に伴って西のギリシャに伝搬されてギリシャ神話の世界を生み、また東のインドに伝搬されてバラモン教からヒンドウ教へと変遷していった。この東への過程のうちで仏教が生じ、また「バガヴァッド・ギータ」も書かれてきた。そしてこの東へのプロセスの果てに韓国があり、日本があるのである。

これでようやくゾロアスター教の理論の内部へと入っていく準備は整った。まずはゾロアスター誕生神話に述べられている「三位一体」の理論が、検討されなければならない。そこで私たちは、生きとし生けるすべてのものが、アフラ・マズダの現れであるという理論を見いだすことになるだろう。この理論が、ヒンドウ教においては、ブラフマンと根本原質と純粹精神との三位一体となり、またキリスト教における父と子と精霊の三位一体となるのだらうと、私は考えている。そして仏教の山川草木悉有仏性の理論とそこから必然的に生じる平等智という考え方は、ゾロアスター教の三位一体理論を背景にして生じてきたのであろう。今やこれらの諸理論のうちに深く入り込むべき時は熟した。